

吉川幸次郎 著  
三好達治

# 新唐詩選



岩波新書

106 a



吉川幸次郎 著  
三好達治

# 新唐詩選

岩波新書

## 吉川幸次郎

1904年神戸市に生まれる  
1926年京都大学文学部卒業  
専攻—中国文学  
現在—京都大学名誉教授  
著書—「新唐詩選続篇」「人間詩話」  
「続人間詩話」「漢の武帝」  
「漱石詩注」(以上岩波新書)  
「吉川幸次郎全集」

## 三好達治

1900年—1964年  
1928年東京大学文学部卒業  
詩集—「春の岬」「艸千里」「一点鐘」  
「駱駝の瘤にまたがって」

新唐詩選

岩波新書(青版) 106

1952年8月10日 第1刷発行  
1965年6月21日 第30刷改版発行©  
1978年11月20日 第46刷発行

¥ 320

著者 よし吉 かわ川 こう幸 じ次 ろう郎  
み三 よし好 たつ達 じ治

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5  
発行所 株式会社 岩波書店  
電話 03-265-4111  
振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

## 序

この書物は、東洋のすぐれた財宝であり、世界の詩のなかでも最もすぐれたものの一つである。唐の詩を、わが国の若い世代の人たちに近づけるべく、吉川と三好が協力して執筆したものである。両人は、おのおのその好む詩をえらびつつ、吉川は前篇において、主としてその訓詁を説き、三好は後篇において、主としてその味い方を説いた。説くところは、三百年にわたる唐の詩のなかでも、ことにすぐれた時期である盛唐せいとう、すなわち八世紀前半の時期にかたより、中唐、晩唐の詩に及ぶことが少ないが、それは主として紙幅の制約のためである。

両人はそれぞれに執筆の部分を読みあった。両人は、その友情を、この書物においては、若い世代にささげる誠実な努力としてはたらかせ得たことを、信じている。

一九五二年六月

吉川幸次郎

三好達治

## 改 版 序

この書の初版が出てから、はやくも十三年の歳月が流れすぎ、共著者三好は、昨年春四月、泉下の人となった。

このたびの改版にあたり、吉川は少許の改訂を、その執筆の部分に加えた。二〇頁、七〇頁、九〇頁、九九―一〇〇頁、一一三頁、一四五頁などに、それはある。また原詩のみを例外として、他の漢字はすべて新字体を用いた。

三好執筆の部分の用字の改編は、岩波書店編集部によって行われた。

杜甫、李白、王維についての連関書としては、岩波版「中国詩人選集」のそれぞれの巻が、旧版の後に出版されたものとしてある。

一九六五年二月

吉川 幸次郎

序

前篇

..... 吉川幸次郎 ..... 一

杜甫 十五首 ..... 二

李白 二十九首 ..... 五

王维 十二首 ..... 一三〇

孟浩然 一首 ..... 一四三

常建 二首 ..... 一四四

王昌龄 一首 ..... 一四九

崔国辅 二首 ..... 一五三

後篇

..... 三好達治 ..... 一七

前  
篇

杜<sup>と</sup> 甫<sup>ほ</sup>（七一二—七七〇）

十五首

杜甫が、唐の文学を代表する詩人であるばかりでなく、中国の古今を通じて最も偉大な詩人であるというのは、誰もあまり異論のないことである。いまこの書物を編むにあたって、杜甫の詩を、はじめにおこう。もつとも杜甫は、唐の国がはじまってから百年ほどして生まれた人である。それまでの百年の間にも、唐の詩は、相当の発展を示している。すなわち初唐<sup>しよたう</sup>の詩人と呼ばれる人たちの作品であるが、いまはすべて割愛しよう。何となればそれらは、杜甫や、これから述べようとする盛唐<sup>せいとう</sup>の詩人たちを、みちびき出すための過程、しかもはるか未成熟の段階にある過程であるに、すぎないからである。

杜甫の伝記のくわしいことは、吉川の別にあらわす『杜甫私記』（筑摩書房）に見える。その前半生は玄宗皇帝<sup>げんそう</sup>と楊貴妃<sup>ようきひ</sup>との恋物語が、はなやかに世の中をいろどった時代に、仕官ののぞみを抱きつつ焦慮する不遇の書生であり、後半生は、にわかにか起った戦乱のさなかを、妻子をかかえて、中国の西南地方、四川<sup>しせん</sup>、湖北<sup>こほく</sup>、湖南<sup>こなん</sup>の各地をさまよいあるく、不幸な家長であった。



その詩が、憂愁に富むのは、まずその為である。

しかし杜甫の詩の憂愁は、そればかりで生まれているのではない。その誠実な人格のゆえにこそ生まれる。世の中の不合理、不公正に対する誠実ないきどおりが、常にその心にあった。そうして常にしいたげられたものの友であろうとしたのである。その誠実さは、自然をうつすにあたっては、対象をつきとおす熟視となり、自然そのものと莊嚴さを争う言語ともなつた。「語もし人を驚かさずんば死すとも休まず」と、みずからもいう。その表現はいのちがけであった。大芸術を成り立たせるものは、偉大な誠実であるということを、杜甫の詩は身をもって示すものである。

杜甫の作品の現在伝わるものは、千五百首ばかり。それに選択を加えることは、古来むつかしいこととされているが、いまはまず短い詩からはじめよう。

### 絶句 二首

江碧鳥逾白

江は碧にして鳥は逾よ白く

山青花欲然

山は青くして花は然えんと欲す

今春看又過

今の春も看のあたりに又過ぐ

何日は歸年

何の日か是れ帰る年ぞ

この詩、いつの作とも、はっきりきめることはできない。四十八歳以後、妻子をひきつれて、放浪の旅に出てからのちの、ある晩春ばんしゅんの日の作には、相違ない。題に絶句ぜつくというのは、みじかうたの意である。うちこの詩のように、一句が五字ずつでできているのを、五言絶句ごごんぜつくといい、七字ずつのは、七言絶句しちごんぜつくという。

第一句、「江は碧にして鳥は逾いよいよ白く」。江こうとは、揚子江ようすこうの本流であつてもよい、支流であつてもよい、西南中国の大きな川は、みな江こうという言葉で呼ばれる。杜甫の故郷である北中国の川ではない。

碧へきの字の本来の意味は、碧玉へきのぎよくである。従つてこの「江は碧にして」も、碧玉のようなふかみどりの水面である。ふかみどりの水面のひろがりをも、日本の川のはばで想像してはいけない。瀬戸内海の諸海峡ぐらいのはばで考えるとよい。中国は大国である。自然の規模が日本とはちがう。三好君もあとの篇で、そのことを説いている。

さて、そのふかみどりの水面の上を飛ぶ、あるいはその上にうかぶ、まっしろな鳥。白という色、それは何ゆえか旅人の悲しみをいざなり色である。しかもそれは碧みどりの水面の上に、くつきりとはめこまれていることによつて、目にしみるように、いよいよ白。故に、「江は碧に

して鳥は逾よ白く」という。

第二句、「山は青くして花は然えんと欲す」。むろん「江」にのぞむ山山である。「青」、これはさみどり。前の「碧」が碧玉を原義とし、凝集的な、従って沈静な青さであるのに対して、これは発散的な、いきおいのよい青さである。音声的にも、前の碧が、*PIK* と、みじかい、ひきしまった音であるのに対して、青は *ching* と、はねあがる。わきあがるような新緑の山山、それを更にめざましくするのは、火のような赤さで、あちこちに咲きほこる花、花、花。「山は青くして花は然えんと欲す」。然の字は、燃の字と、まったくおなじい。王維の輞川別業の詩にも、「雨中の草色は緑にして染むに堪え、水上の桃花は紅くして然えんと欲す」という。しからばこの詩が「然えんと欲す」という言葉であらわすものも、桃の花であったか。

江碧鳥逾白、山青花欲然。要するにそれは、自然が、そのエネルギーを、最も充実した形で示す時間である。強烈なもの、剛毅なもの、充実したものを愛する杜甫の心を、強くひきつけるべき自然であり、また剛毅な言葉、強烈な言葉を愛するこの詩人にして、はじめて表現され得べき自然であった。*jiang bik niao iu bok, shan ching hua iuk ran* と、一語一語の音声も、みなはなはだ強烈である。

しかし、万物はみな推移する。この自然の精力を、満幅に示す時間も、やがて次の季節へとうつりゆくであろう。さればいう、「今の春も看のあたりに又た過ぎなんとす」。推移の感覚、

それは常に中国の詩の根底にある。杜甫の場合も、もとより例外ではない。去年の春も、おとしの春も、おなじようにしておのれの前を通りすぎて行った。今年の春も、又このようにして、通りすぎてゆくので、あろうか。依然として旅人であるおのれをおきざりにして。「今春も看\*のあたりに又過ぎんとす」。

ところで注意すべきは「看\*のあたりに又過ぎんとす」の看かんの字である。自然の推移に敏感である人間は、反射的にそれに抵抗して推移をおしとどめたく思う。それは徂ゆく春を惜しむという風流の心からばかりではない。少くとも杜甫の場合は、そうではない。季節の変化によって示される自然の推移、それとおなじ時間の上ののって、おのれの生命も推移して行く。かくおのれの生命をも巻き込みつつ推移してゆく世界の推移、それを少しでもおしとどめようとする意慾、それは、風景に対する熟視となって現れる。しかしながら、それはむなしき熟視であつて、じつと見つめる杜甫の目の前を、自然は冷淡に音もなく推移してゆき、春ははや半ばをすぎんとする。「今春看又過」。看の字には、そうした感情がこもっているのである。

かくて推移の感覚をよびさまされた詩人は、最後の句では、推移の流れのなかにうかぶおのれをとりあげて、おのれの悲しみをのべる。

「何の日か是れ帰る年ぞ」

一度失った官吏としての地位を、再び得るためには、まず長安に帰らねばならぬ。しかしそ

れを實現し得る年は、いつの日にめぐり来るのであろうか。来る春も、来る春も、おのれの生命は、旅人として推移する。春のすぎゆくことに、かねてののぞみである帰年は、こちらへと近づくのではなくして、あべこべにむこうへむこうへと、おしやられるように感じられるではないか。

杜甫の危懼は、不幸にしてあたり、五十九歳をもって、湖南省の舟中でなくなるまで、終生、長安に帰ることはなかった。

ところで、このみじかい詩の底には、中国の詩に常に有力な、二つの感情が流れている。ひとつは、さっきのべた推移の感覚である。推移する万物のひとつとして、人間の生命も、刻刻に推移し、老いに近づいて行く。悲哀の詩はそこから生まれる。歓楽の詩もまたそこから生まれる。天地の推移は悠久であるのに反し、人間の生命は有限である。有限の時間の中を推移する生命は、その推移を重々しくせねばならぬ。推移を重々しくする道、それは推移の刻刻を、充実した重量のある時間とすることである。歓楽はその道である。富、榮譽もまた、その道である。

もうひとつは、人間は不完全であるのに対し、自然は完全であるとする感情である。自然、ことに山川草木は、常に秩序と調和にみち、適当な行為を適当な時期に示し得る。春ともなれば、江は碧に、山は青く、花は然えつつ、そのエネルギーを充分に発散する。人間はそうはゆ

かない。おのれは政治家として、おのれのエネルギーを、人人に対する善意として、はたらきかけたのに、そのぞみはいつまでも達せられない。人間も自然の一物である以上、自然のごとく秩序と調和にみちた世界を作り得るはずである。いな、人間は、自然のうちでも、最も能動的な、万物の霊長である以上、秩序と調和とを、自然の本来以上におしすすめ得るはずである。しかし実際は、そうはゆかない。能動的であるだけに、そうはゆかない。秩序と調和の源泉でありその典型である自然。その自然の選手たる地位を与えられながら、秩序と調和を失いがちな人間。両者はかくて阻隔する。この阻隔に対する悲しみ、それはひとり杜甫の詩のみならず、中国の詩のおおむねの奥を流れる普遍的な感情の、また一つである。

この詩に対する H. A. Giles の英訳は、次のごとくである。

*White gleam the gulls across the darkling tide,*

*On the green hills the red flower seem to burn;*

*Alas ! I see another spring has died.....*

*When will it come—the day of my return !*

*Chinese Literature, P. 153*

遅日江山麗

遅き日に江山は麗しく

春風花草香

春の風に花草は香んばし

泥融飛燕子

泥は融けて燕子の飛び

沙暖睡鴛鴦

沙は暖かにして鴛鴦の睡る

この詩、前の詩ほどには、有名でないけれども、前の詩と、同時の作である。

日ざしのおそい春の日、山も川も、色彩に富んでうるわしく、空気は、花のにおい、草のにおいにみちている。つばくろは、巢を作ろうとして、泥をふくんでとび、川岸の沙はまには、めすおすつがいのおしどりが、日ざしをあびて、ねむっている。

ものはみなかく調和を得て、幸福であるのに、おのれひとり不幸であるという悲しみが、この詩の奥にも、まったく蔵せられていないではない。しかしこの詩では、そうした反発は、むしろ微弱であると、見受けられる。杜甫は、この詩では、そうした調和を、無心にたのしんでいる。いいかえれば、おのれも自然の一物である以上、そうした完全な調和の中にはいり得る可能性を、もつことを信じ、その可能性の保証として、眼前のうつくしい江山と、幸福そうな小動物とに、見入っている。

卽事

百寶裝腰帶

百寶は腰帶に装い

眞珠絡臂鞆

眞珠は臂鞆に絡う

笑時花近眼

笑いし時は花の眼に近づき

舞罷錦纏頭

舞い罷れば錦は頭に纏う

これは舞いをまう可憐な少女を詠じた詩である。「一生愁う」といわれた杜甫も、憂愁の詩ばかりを作っていたわけではない。時にはこういう詩も作っている。

舞いは中庭の露天で舞われる。日本のようにお座敷での芸ではない。

「百宝は腰帶に装い」。百宝とはくさぐさの寶石宝玉である。それが「腰帶」に、きらきらと、ぬいつけ、はめこんであるといえ、日本の丸帯のように、はばのひろい帯であったろう。その色は濃い朱か、濃い赤か、何にしても豊富で濃艶なものを好むのが、唐の人の趣味であった。

「眞珠は臂鞆に絡う」。臂鞆とは、腕にはめるたまきである。それを眞珠がとりまいている。舞いのためのいでたちであり、きりりとした装束である。舞いは活潑な舞いであつたとせねば



ならぬ。日本の舞踊よりも、もっと西方的なものを考えてよい。

ときどき、あどけなく笑う。いやらしい笑いではない。あどけない少女の笑いである。笑うたびに、舞いの席をめぐるさきほこる花が、すうっと、少女の目もとに引きよせられる。そういう風に感ぜられる。それが「笑う時は花の眼に近づく」である。

「舞い罷おぼっては錦は頭に纏う」。

舞いがすむと、御褒美として、錦の反物を頭にのっけてもらうのが、当時の風俗であったこと、宋の程大昌ていだいしやうの随筆、演繁露えんはんろに、くわしい考証がある。人人の喝采のうちに、にっこりと笑ってお辞儀をする少女の姿が、目に見えるようである。

杜甫は李白のように、放恣に婦人を愛せず、ただ一人の妻を守りとおした謹厳な夫であった。しかし美しいものを、美しいと感じた時には、その大手筆を、ちょっとうごかして、こうした詩も作っている。「笑う時は花の眼に近づく」とは、やはり杜甫でなければいえない句である。それは、わが心をうごかす外物を、しかしそのままの形で、パッシヴに描写するだけでは満足せず、わが言葉によって、新しい自然を作りあげようとする杜甫の気力、それがここにも、ふと現れたものであった。